

## 流れゆく星のように

千葉県市原市 風野 涼一

その年、ぼくは二回もの入院をした。

一回目は、大学が夏休みに入ってもまもなくの頃で、ぼくは買ったばかりのクルーザー・バイクに跨り、のんびりソロツーリングを愉しんでいた。自宅から上総鶴舞を経由し、高滝湖へとむかう緩いカーブに差ししかかったとき、無理な追い越しをかけてセンターラインをはみ出してきた対向車が突然目の前に現れ、避ける暇もなく正面から激突した。

奇跡的にも、投げ飛ばされた軀が相手の車のボンネットに乗り上げて撥ねたため、左脚の単純骨折といった怪我で済んだが、もし対向車の下部に巻き込まれていたら、いま頃、ぼくは愛車『ディアベル』のように、見るも無残な姿に成り果てていたにちがいない。

近くの病院に救急搬送され、そこで数か月もの入院生活を余儀なくされたものの幸いにして後遺症はなく、盛夏を知らずに退院した頃には、街には空風が吹き、舗道には枯葉が舞っていた。

二回目は、それから数か月経った年の瀬だった。

昼からの胃痛が夜更けとともに強くなり、やがて額に脂汗がにじむほどになった。さすがにこれは尋常ではないと、父の運転する車で大宮神社に程近いY病院の夜間診療へおもむくと、果たし

て急性の胆嚢炎たんのうであった。即入院と決まり、肩に痛み止めの注射を打たれ、車椅子で病室へと送られた。

「しかしまあ、夏、冬と、同じ年に二回も入院とはな」

父の声には、心底呆れたといったような響きがふくまれていた。翌朝から、来るべき手術の日にならぬと点滴だけの完全絶食となり、臥床したままの入院生活は、夏のとくと同様、退屈きわまりなく、退院するまでに五十冊以上の小説を読んだ。

ぼくはテレビが嫌いだった。つまらない芸人たちが大声でわめくばかりで、どこが面白いのかさっぱりわからない。だから無聊を慰めるには、読書のほかには良い方法が見当たらなかったのである。

母親が、見舞いのたびに運んでくる小さなダンボールには、昭和時代のいわゆる「名作」と呼ばれる作品が詰め込まれていた。また親父の押しつけかよ、と内心苦々しく思いながらも、しかし、こんな病院では、ほかにやることもなく、不承不承、ぼくは父が〈厳選〉した昭和の名作を読み耽る毎日を送った。

川端康成、太宰治、坂口安吾、梶井基次郎、志賀直哉……風俗の古臭さは否めなかったが、そうした偏見をなしに読んでみれば、佳い作品はたくさんあって、この濫読は、その後のぼくにとつて意想外の収穫となった。そうして、ぼくはダンボールの「昭和名作シリーズ」を読み終えると、枕許のテレビ台に積みかさねていった。

千葉は半島だからか、比較的温暖な気候で、雪の降ることは減

多にない。だが、年が明けての一月にしてはめずらしく、踝丈を  
超える雪に見舞われた。

雪道を走るのは怖いと言って、三日と置かずに来院していた母  
の見舞いが途絶えようと、さすがに名作シリーズも読み尽くしてし  
まい、ベッドで輾転てんてんとしていたものにも嫌気がさして、ほくは点滴  
台のスタンドをつかむと立ち上がり、廊下に出た。どこかに図書  
室のような処はないかと思ったのである。

しばらく行くと薄暗かった廊下が不意に明るくなって、窓に降  
る雪が見て取れた。近づいてみると、窓から俯瞰ふかんされる街は一面、  
雪で真っ白に染められ、昼でもライトを点灯した車が列をなして  
いた。

——よこしなぎの雪が寺泊の海岸へ降りかかる。

数日前に読んだ水上勉の小説の一節が思い起こされた。

このまま雪に埋もれてしまうのではないかと思うばかりの激し  
い降雪で、「よこしなぎ」というのは、きつとこんな感じのこと  
なのではないかと思ったとき、誰かが大きな咳をした。辺りを見  
廻してみると、エレベーターホールの片隅のスペースに休憩コー  
ナーがあつて、椅子に座つて男性が一人、本を読んでいた。傍ら  
のテーブルには、四、五冊の本が横積みよこ積みにされている。

病院の本かなと、さりげなく近づいてみると、男性の読んでい  
るのは漫画本で、しかも少女漫画だった。装丁はぼろぼろで、手  
垢に穢れた数冊の本は、リサイクルショップに持って行つても突  
き返されそうなシロモノだった。

男性は四十代前半か、一見、実直なサラリーマンといった感じ

で、昭和文学的に言えば、いわゆる《ダンディな男》といったと  
ころかもしれない。そんなダンディな中年男性が、「これぞ少女  
漫画」と言わんばかりの表紙の漫画を一心不乱に読んでいるとい  
うのが、なんとも不釣り合いで滑稽なものに感じられ、思わずその  
場でぶつと吹き出すと、男性は、その声でほくの存在に気づいた  
らしく、「なに」と睨みつけるように、横眼でほくを見た。

「なんか用？」

男性が、今度ははっきりとした声で言った。

「いえ。あの……それ、少女漫画ですよね」

「だから？」

「いえ、別に……。ただ、めずらしいなと思って……」

「いけないか？」

「いえ。いけないわけ——」と言いかけたつぎの瞬間だった。い  
きなり男性が、ほくの点滴台を思い切り脚で蹴り倒したのである。  
点滴のチューブに引つ張られ、ほくは軀のバランスを喪つて、そ  
の場に転倒した。点滴台の倒れる音が廊下に反響し、程なくして  
看護師さんが駆けつけてきた。

「どうしたんです？ なにやってるんですか」

驚いたような看護師さんの声だった。

「なにがあつたんです？」

もう一度、看護師さんが強い口調で言った。

「いえ、なんでもありません。ちょっと軀のバランスを崩して」

「吉村さん、あなたも。近くにいたんなら——」

このときほくは、初めてこの男性が「吉村」という名前である

ことを知った。

ぼくは看護師さんの肩に手をかけて起き上がると、抱きかかえられるようにして自分の病室へともどったが、その間、かれは本に視線を落としたまま、ぼくたちに一瞥も与えることはなかった。

翌朝も、雪は降りつづいていた。

ラウンドにきた看護師さんに訊ねてみると、Y病院には「レストルーム」があつて、その本棚に本が置いてあると教えてくれた。

「でも、啓太さんの好きそうな本はないかもね」

看護師さんは、テレビ台に山と積まれた古い文庫本を見ながら、そう言つて笑つた。

ぼくは点滴台のスタンドをつかみ、病室を出た。

薄暗い廊下をぬけて明るいホールに來ると、あの男性が、やはり昨日と同じ休憩コーナーで本を読んでいた。嫌な奴に会つたと思ひながら、傍らを足早に通り返ぎようとしたとき、「ちよつと、君」。男性の声がぼくを呼び止めた。ぼくは肩を撥ね上げ、それから、怖々とかれのほうを肩越しに窺つた。

「どこへ行くんだ？」

鋭い視線が、ぼくの眼に飛び込んできた。

「レストルームに……。本があるというので、それを見に……」

「本ならここにもある。そして、おれの前の席も空いている」  
かれが、低い声で言つた。

警戒しながら、テーブルをはさんで、むかいあわせの椅子に腰

を下ろすと、意外にも「昨日はすまなかつた」と、男性が頭を下げた。

「つい、カツとなつてしまった」

「いえ……」と、ぼくはうろたえて、

「こつちこそ、すみません……。吉村さんのことを笑つたりなんかしたから」

すると、吉村さんはかすかに笑みをうかべ、テーブルの薄穢れた本を見つめながら、「そう思うのも無理はない」と言つた。

「確かに可笑しいだろう。いい歳をした中年のおっさんが、こんな幼稚な少女漫画を読んでいるなんて」

ぼくは肯定も否定もしなかつた。下手なことを言えば、またかれの逆鱗にふれてしまいそうで、ただ軀をかたくしてうつむいていた。

「君は、ずいぶんと若そうだが、仕事は？」

「いえ、まだ学生です」

「じゃあ、大学生か。どこの大学？」

「千葉大です」

「優秀だな」

「そんなことはありません」

受け答えをしつつも、しかし、こうして吉村さんの前にいることは、正直苦痛だった。昨日の出来事は、未だ心の片隅に澱となつている。かれは説言のつもりで話しかけてきているのだろうか、ぼくにはその言葉一つひとつが訊問のように感じられるのだつた。

「キャンパスは亥鼻<sup>いのほな</sup>？」

「まさか……。西千葉です」

「じゃあ、法経か工学部か」

「いえ。……教育学部です」

「へええ。なら、将来は学校の先生か」

ほくは、大きく首を振った。

「じゃあ、なんで教育学部に？」

「ぼくの本当の夢は獣医だったんです。北大の獣医学部に入るのが夢だったんです。でも、センター試験がふるわなくて、それに親からも浪人は駄目だと言われていたので、それで、入れる学部を探していたら、千葉大の教育学部はどうだと言われて……」

「いや。そうは言っても、千葉大ならたいしたものだ。旧制一校だし、教育学部なら前身は千葉師範だ。悪い大学じゃない」

「でも、たぶん教師にはならないと思います」

吉村さんは手にしていた漫画本を置いて、不思議そうな顔をした。た。

「ぼくみたいな人間が教師になったら、子どもたちが不幸です。そんなことをしたら罪ですよ」

「罪？」と言った吉村さんの眼に鋭い光が宿った。

「君は、そんなことを罪だと思っているのか」

「だって、北大に入れないから、じゃあ千葉大、なんて……。そんなデモシカ教師の授業を受ける子どもたちが可哀想ですよ。それこそ罪つくり以外のなものでもないですよ」

吉村さんは、ぼくの言葉を黙って聞いていたが、やがて小さく

「罪か」とつぶやくと、雪の降りしきる窓のほうへ視線をむけた。

「人は皆、生まれながらにして罪を負っている。だが、その深さからすれば、おれはおそらく、ほかの誰よりも深い罪を負っている」

ほとんど聞き取れないような声で言った吉村さんの言葉に、思わずぼくは、かれの横顔の暗く翳になっっている部分を見つめた。

「そんな……深い罪ってなんですか？」

だが、吉村さんはその日、それ以上、なにも語ることはなかった。

雪が止んだのは、その翌日だった。

「もうイヤ！ 雪道を走るのは、こりこり」

そう言いながら病室に入ってきた母は、マフラーをとると、大きな紙袋からぼくの着替えやタオルを取り出しはじめた。

「こりこりって、どうしたのさ。事故でも起こしたの？」

「坂道がアイスバンプでスリップしちゃって、ブレーキを踏んでもどンドン後ろに車が動いちゃうの。後ろの車には何度もクラクションを鳴らされるし、もう最低！」

母は、乱暴にぼくの汚れた衣服を袋に詰め込むと、

「啓太も、母親を頼ってばかりいないで自分で洗濯の一つもしなさいよ。あるんでしょ、洗濯機と乾燥機ぐらい。この病院」

と、八つ当たりのように言った。

「わかった。わかったよ」と、ぼくは首をすくめた。

「それから、これがお父さんから頼まれたやつ」

母から手渡されたのは小さなダンボール箱で、なかには、やはり父厳選の昭和名作シリーズが入っていた。

「あと、これね」

母が、コピー用紙の束を無造作に差し出した。

「やった！ サンキュー」

それは、立野信之という作家の『流れ』という長編小説の一部をコピーしたものであった。

立野信之は千葉県出身の作家で、市原郡五井町役場に勤めていたが、その文才を認められて、昭和28（一九五三）年には、『叛乱』で第28回直木賞を受賞している。

代表作の一つである『流れ』のなかには、青春時代によく散策していたという飯香岡八幡宮が登場するらしい。幼少の頃から奉拝におとずれていた八幡宮が、七十年ほど前にはどのように描かれていたのか、そのことにぼくはかねてから興味があった。しかし、検索しても本はすでに絶版で、市内の図書館に蔵書はなく、県立図書館でも個人貸出ができない資料となっていた。

「図書館の人も困ってたわよ。『飯香岡八幡宮が登場する箇所だけ』でいいからコピーを取ってくれ」って言っても、飯香岡の『い』の字も出てきやしない……。レファレンス、大変だったんだからね」

母は少女のように頬をふくらませた。

翌朝、看護師さんのラウンドを終えたぼくは、コピーの束を片手に点滴台のキャスターを鳴らしながら、廊下を足早に歩いた。

だが、休憩コーナーに吉村さんの姿はなく、テーブルには、か

れがいつも読んでいる漫画本が無造作に置かれてあった。ぼくは顔を近づけて、表紙を仔細に見た。『流れゆく星のように』……それがタイトルで、著者は一度も聞いたことがない名前だった。

——なんで、こんなにぼろぼろになるまで？

ぼくは椅子に腰かけると、本を手にし、ページを繰った。思わず感嘆の声が洩れた。描線はきめ細やかで、繊細なタッチが隅々にまで感じられ、一コマコマがそれだけで芸術性の高いペインティングのようだった。

「おっ、やっぱり、そういうところは大学生だな。勉強か」

吉村さんだった。ぼくは慌てて手にしていた本をテーブルにもどし、コピーの束をテーブルにひろげた。

「教師はいいぞ。やっぱり、君は教師になったほうがいい」

吉村さんはそう言うのと、いつもの席に腰をおろした。

「どうして、そんなに教師になることを薦めるんですか」

「教師になるのが、おれの夢だったんだ」

「そんなあ。自分の夢を勝手に押しつけないでくださいよ」

「冗談だよ。まあ、そう膨れるな」

吉村さんは、ぼくの頭を拳で小突いた。

「おれは、実は役所の職員でね。それで、教師に対する役所の厚遇を知っているから君に奨めるんだ。たとえば、校長会議がひらかれるとなると、教育委員会の職員は総出でその準備に東奔西走する。気は使うわ、神経は磨り減らすわ、それは並大抵のものじゃない」

「そんなに校長先生って偉いんですか」

「役所ではトクタイ（特別待遇）さ。部長クラスの連中だって、このときはやはり平身低頭で対応する」

「そうなんですか。なら、教師も悪くないなあ」

多くの言葉に、吉村さんは、はにかむような笑いをした。

「ところで、なんの勉強をしていたんだ。レポートか？」

ぼくは、立野信之という作家が、旧五井町のこの地で仲間たちと同人誌を発行するなどして青春時代を過ごしたこと、八幡宿に鎮座する飯香岡八幡宮が『流れ』という小説に登場することなどを、かいつまんで話して聞かせた。

「そこは、頼朝の《さかさ銀杏》で有名な神社だな」

「でも、飯香岡八幡宮なんて、小説のどこにも出てこないんです。敢えて言えば、ここ」と、ぼくはコピーの文章の一節を指差した。

ある日——初夏の爽やかな日だった——高志はいつも帰る汽車に乗りおくれたので、仕方なく、次の汽車までの二時間を過ごすために、海岸べりの神社の境内へ出掛けた。

ほこりっぽい停車場よりも、潮の香のする緑の森の園のほうが快適だったからである。

「確かに『海岸べりの神社』としか書かれていないな」

「県立図書館の司書にレファレンスしてもらったんですが、あと二か所、『毎朝、彼は部落を出て田甫を横切り、町はずれの神社の松並木をくぐり』と『朝々、田甫を越え、町はずれの神社の松並木をくぐり』という文章が後編の『驟馬』という章に確認でき

るだけで、ほかは神社の記述はまったくありません」

「『流れ』が書かれた時代には、まだ東京湾は埋め立てられていない。だから、八幡宮は海沿いに——つまり、『海岸べりの神社』だったんじゃないかな。君は、全文を読んだのか」

「いえ、市立図書館じゃなくて、県立図書館の書庫に一冊だけ。しかも『貸出不可』だったので、このコピーのほかは読んでいません」

「なら、実際に大きな図書館へ行って、自分の眼で確かめることだな」と言って、吉村さんは椅子の背に軀をもたせかけた。

「通読して、後は千葉大文学部のカノジョにでも訊いてみればいい」

「カノジョなんていませんから……」

「なんだ、大学生だろう？」

「彼女いない歴二十年ですよ、どうせ」

不貞腐れたように言うと、吉村さんは声を上げて笑った。こんなに感情を表に出す吉村さんを見たのは初めてだった。

「吉村さんみたいに奥さんがいる人には、わからないですよ、ぼくの気持ちなんか」

「いや。奥さんはいないよ。かつては、そういう人もいたがね」「かつて？」

「ああ。とてもいい子だった。あんな女の子には、もう二度と巡り会えないだろうな」

吉村さんは笑いを止め、窓の外へ視線を投げた。ぼくは吉村さんが、いわゆるバツイチで、立ち入ってはならない領域に、迂闊

にも足を踏み入れてしまったのではないかと焦った。

長い時間、吉村さんは黙っていたが、やがて、「養老溪谷だったんだ」と、ぼつりと言った。

「おれが殺してしまった」

「えっ」

「殺したようなものだ」

「……どういふことですか」

そして、吉村さんは、記憶を辿るように話しはじめた。

……初めて彼女と出逢ったのは二十年前。役所に入ったばかりで、おれは二十五歳だった。公民館が主催するウォーキングのイベントにヘルプで参加したとき、そこに彼女がいたんだ。

小湊鉄道の養老溪谷駅を起点に、宝衛橋、夕木台、弘文洞跡を経由し、出世観音、観音橋、白鳥橋を渡り、養老溪谷駅にもどってくるという約二時間のコースで、紅葉の美しい季節だった。

彼女は初心者でペース配分がうまくできなくて、どうしても先頭集団から遅れてしまう。そこで、おれが彼女のサポートすることになった。ペースを落として、いろんなことを話しながら歩いたよ。

彼女の目的は「出世観音」に詣でることだった。出世観音というのは、八〇〇年ほど前、頼朝が戦勝祈願した観音像のことだね、いまは養老山立國寺に祀られていて、開運招福の守護神とされている。

おれは、なぜ彼女がそれほど〈出世〉を願っているんだろうと

思ったが、彼女が漫画家の卵であることを知って合点が入った。当時、彼女は、著名な漫画の懸賞に応募していたんだ。グランプリに輝けば、プロとしての道が約束される。彼女にとっては、それが〈出世〉に当たることで、だから是非でも手に入れたい賞だったんだ。

同い年齢だというのに自分の夢を捨てることなく追いかけていく彼女の生き方が羨ましく、眩しいものに見えた。そして惹かれた。全身で応援したくなかった。自分がこんなことをよくも言えたものだといいまでも思うが、おれは彼女に言ったんだ。

「一目惚れしました。あなたのそばで応援させてください」

おれたちは交際わずか半年で結婚。そして、合わせるようにして彼女は見事グランプリを勝ち取り、念願のプロデビューをした。運筆だったけれども、彼女の描く世界観に魅了される読者は多く、やがて連載をまかされるまでになった。でも、漫画家の仕事というのは想像以上に過酷だね。切間近になると、もう戦争だった。おれもアシスタントもどきのことを何度やったか知らない。徹夜でペンを走らせている小さな背中……。いまでも眼にうかぶよ。忙しかったけれど、おれの人生のなかで、あのときが実はいちばん幸せだったんじゃないかって思う。だが――。

そこまで言うのと、吉村さんは突然、言葉を途切らせ、思い出し

たようにぼくのほうをふりむくと、「啓太」と言った。

「君は神がいると思うか」

「神は罪深い人間に、どういう罰を与えるだろうか」

唐突とも言える難詰に、ぼくは一瞬、返すべき言葉を見失った。

「罰なんて……なんで、そんなことを考えるんですか？」

「その漫画、彼女が描いたものなんだ」

言われてぼくは、テーブルの五冊の本に眼を走らせた。……これが、吉村さんの奥さんの？

「全五巻……。最終巻の最後のページを見てみる」

ぼくは、言われるがままに本を手に取り、最後のページをひらくと、そこに書かれてある文章に息を呑んだ。

著者である雛形ひろみ氏は、急性骨髄性白血病のため、29

歳で逝去されました。本作品は絶筆となりましたが、故人の遺志により、未完のまま発表することといたしました。

S 出版社編集部

「もうすぐ自分の命が尽きるということを彼女は知っていた」

吉村さんは、静かに言葉をつづけた。

「だが、おれは彼女が癌だったなんて、これっぽっちも気づかなかった。だから、メ切近くなれば、必死になって手伝いながら、さんざん発破をかけたよ。たかだかデビューして数年の漫画家が休載なんかしたら、もう漫画の仕事は来なくなる、やるだけやろう、出来るところまで頑張ろう……。もし彼女が癌と知っていたら、そんなことは言わなかっただろう。なのに、おれは……」

吉村さんは言葉を切ると、ともすれば消えそうになる蠟燭の火を見るように、窓の外の白い風景を眺め、眺め、黙っていたが、

深いため息をつくとき、静かに眼を閉じた。

数日後、ぼくは手術を受け、まもなく退院した。看護師さんと母に連れられて玄関を出ようとしたとき、そこに吉村さんが立って、ぼくが出てくるのを待っていた。かれはぼくの姿を認めると、近づいてきて手提げの紙袋をぼくの手持たせた。紙袋には、あの五冊の漫画本が入っていた。

「えっ、こんな大事な……。ぼく、受け取れません」

「いいんだ。君に受け取ってもらいたいんだ」

「……………」

「いいか、啓太。これを完結させずに死んだことが、あいつにはどれだけ心残りだっただろうと思う。この世には生きたくても生きたらなかつた人間がいる。それだけは忘れないでほしい」  
ぼくは無言でうつむいていた。なにも言えなかつた。なにか言えれば、言葉がすべて涙になりそうな気がした。

「吉村さん、ここにお見舞に……。会いに来てもいいですか」

「ここは病人が暮らす家だ。健康になった君が来るころじゃない」

「でも……」

「また会おうな」

吉村さんは、ぼくの手を取ると、強く握りしめた。

「きっと、また会えるさ」

……それから一か月後、ぼくは再びY病院の玄関をくぐった。

だが、どの病室を見て廻っても、「吉村敦」という名の入ったプレートはなく、ナースステーションをおとすたばくは、一週間ほど前に吉村さんが死んだことを告げられた。そのとき、ぼくは初めてかれの病気が癌であったことを知った。入院時、すでに癌細胞は全身に転移していて手遅れの状態だったという。吉村さんは、末期の癌であることをぼくに明かすことなく、この世を去ってしまったのである。

病院を後にすると、ぼくは、新しく買った中古のバイクで清澄養老ラインから県道81号線を使い、養老溪谷までの道を走った。吉村さんが生涯愛しつづけた女性と初めて出逢ったという溪谷をどうしても一目見たくなったのだ。トラックを抜かし、後方から煽ってくるセダンを振り切って、おんぼろのバイクを駆った。

風を切って走りながら、ぼくは考えた。

吉村さんは、最愛の女性を死に追いやった罪を贖おうとしていた。あの漫画を儀式のように繰り返し読んで、ひと時も忘れずに想いつづけていたというのは、吉村さんにとって贖罪の一つのカタチだったのかもしれない。でも、それは贖罪に値することだったのだろうか。それは愛という名を借りた呪縛ではないのか。亡くなった吉村さんの奥さんは、そんな吉村さんの姿を望んでいただろうか。

溪谷に着いたばくはバイクを降りた。そして、覚えたばかりの煙草を喫った。煙は苦く、辛かった。ふと、ぼくの心に吉村さんの最後の言葉が思い起こされた。別れ際に吉村さんは、ぼくに言った。

「また、会おうな」

笑って、「きつと、また会えるさ」。そう言ったのだった。その言葉を聞いたあの刹那に、ぼくは吉村さんに問いかけられたような気がする。人間の愛とはなんなのか、人の命とはなんなのか……。

それに答えられるだけの力は、いまのぼくにはない。いや、それは年齢をかさねるごとに、ますますわからなくなってゆくようにさえ思える。

でも、これだけは言える。命というものが、たとえ小さく儂いものであったとしても、それは、きつと、永遠のものであるということ、それだけは確かなことだと……。

了